

いまむらしんとはっけん できごと ちゅうしんぶぶん
今村信徒発見の出来事（中心部分のみ）

1867年・(慶応三年)の始めには、旧筑後国今村で、キリシタンの一大集団が
発見された。そのきっかけとなったのは、浦上城の越の紺屋が藍を仕入れるため、
久留米地方に出かけて行ったことだった。たまたま今村にもキリシタンが潜んで
いると聞き知り、早速ローケイニユ神父(Laucaigne)に伝えた。ローケイニユ神父
は、中野の深堀徳三郎、土井の相川忠右衛門、上原の原田作太郎の三人に、今村
を調査するよう勧められた。三人は大いにはりきってこのすすめに応じ、もう一人、
道上の深堀茂一を加えて都合四人、2月23日、天主堂に行き、聖体を拝領した
上で、喜び勇んで浦上を出発した。肥前(今の佐賀県)の多良から船に乗って筑後
の若津(今の大川市の近く)へ渡り、陸路を経て、3日目の朝久留米の上手に当る
府中についた。

府中から今村は程近く、早くも午前中に今村付近に着いた。茶店に寄って一休み
して路を聞くと、西目の今村か、北目の今村かと尋ねるので、でたらめに西目の
今村と答えた。そして教えられたまま茶店を出て歩きだした。たまたま相川忠右
衛門の草鞋の紐が解けた。一人だけおくれて紐を結び直していると、茶店に立寄っ
ていた一人が「北目ならば、藍もあれば椎茸もある。西目は米のほかは何一つな
いのになん、何のために行くのだろう」と話し出した。するともう一人が「いやあそ



こは変な処でな、昔はキリシタン宗、今は
転び宗というのを奉じ、他村と縁の取結び
もしないそうだと話した。聞くともし
に聞いていた忠右衛門は「さてはよいこと
を聞きこんだ。愈々それに違いない」と、走
って三人に追ついてこの話を知らせて、相
共に喜んだ。

やがて今村について路傍の家に入った。
煙草の火を貰い、そのついでに話のいとぐ
ちを求めようと思ったからだった。だがあい
にくと留守で、火の気はあったが誰もいなか

った。家の中を見廻したが、神棚もなく、仏壇もなく、門札さえもない。確かに
キリシタンの家らしい気がする。しばらく待っても帰って来ない。やがて昼近く
なった。小店を見つけて昼飯を頼み、座敷に上った。村の人々は長崎から怪しい男
が入りこんだというので、男も女も老人も子供も、大勢寄り集って来て、様子
をうかがった。四人は店の主人に一夜の宿を頼んだ。主人は驚いて強硬に拒絶し
た。

主人「ここ旅籠屋ではない。旅籠屋でないのに旅人を泊めると、旅人調から咎
められても、申し開きが出来ない。府中に宿らっしゃれ。府中には傾城（遊女の
意味）も居れば愉快もできる。そして用事があれば明日又お出になったら、いい
じゃありませんか」。

四人「そう言わずに、泊めて下さいな。できぬとおっしゃるのに、強いてお願い
するのは、ちと無理言うですけれども、それは、此処に懐かしいことがあるから
です。ぜひ今夜は泊めて下さい。」

主人「いやできません。」

四人「そうおっしゃらず泊めて下さい。」

主人「どうしてもできません。」

と盛んに争って居る時、友次郎という人の姉で、本郷村の字古賀に縁付いている
婦人が来合せた。

婦人「お前さん方はそんなに争って見たところで、とても解決できる話ではな
い。ぜひこの近付に泊りたいお望みならば、ちと遠方ですけれども、宅までお出で
なさい。泊めてあげますから」

四人「どうぞそうして下さい」

四人は非常に喜んで後からついて行くと、今村の端に、女で男の髪結いをして
いる一銭屋がある。名をおシマと呼び、元来は天草の生れで、今村の平田新吉と云
う人の妻となって居た。友次郎の姉もおシマとはかねてからごく懇意の間柄であ
ったと見えて、通りがかりに、ちょっと立寄った。夫の新吉は外出中でおシマ
一人しか居ない。浦上の四人をじろじろ見て、友次郎の姉に尋ねた。

シマ「^{どこ} ^{かた}何処のお方ですか」

ともじろう あね ながさき ^{かた} ^{やど} ^か 友次郎の姉「長崎のお方で、宿を貸すものがなく困りぬいて居られたから宅へ案内するところです」

シマ「^こ ^が ^{えんぼう}古賀は遠方ですよ。^とここに泊まってはどうか。^{はなし} ^{あす} ^い話があれば明日でも行かれますもの。^{たびびとちよう} ^く ^{とき} ^{わたし} ^{きょうだい} ^い旅人調が来る時は、私の兄弟ですと言っておきますさ。^{こと} ^{たく}殊に宅は^{いっせんや}一銭屋ですから、^{もうしひら}いくらでも申開きはできます」とねんごろに^い言ってくれたので、^{やっかい}そのまま厄介になることにした。^{とき} ^{ごご} ^{ろくじごろ}時は午後の六時頃であった。

シマ「^{ゆうはん} ^た夕飯は炊きますか。」

^{よにん}四人「どうぞ。」

シマ「^{さい} ^{なん} ^{にわとり}お菜は何にしませうか。^い 鶏はどうですか。」

^{とお} ^{さぐ} ^い ^{ほどいまむら} ^{かな} ^{せつ}おシマもさるもの遠くから探りを入れた。なる程今村でも、いま悲しみ節をつとめて^{よにん} ^{おも}いるのだなと四人は思った。

^{よにん} ^{にわとり} ^た四人「いや 鶏は食べません。」

シマ「^すお好きではないのですか。」

^{よにん} ^す ^{いまた} ^{とき}四人「好かぬのではないが、今食べる時ではありませんから。」

シマ「^{たまご}そんなら卵はどうですか。」

^{よにん} ^{にわとり} ^{たまご} ^{いっさい} ^た ^{とき}四人「^た 鶏も卵も一切食べません。食べてはならぬ時ですから。」

^{ふたり} ^{ふじん} ^{たが} ^{かお} ^み ^{ほほえ} ^{よにん} ^{ふたり} ^{ふじん}二人の婦人は、互いに顔を見せて、にっこり微笑んだ。四人は、この二人の婦人が、^{きりしたん} ^{まちが} ^み ^{なかにわ} ^た ^{うち}いよいよ切支丹に間違いないと見てとったので、まだ内庭に立っている中に、^{いっほん} ^{とりだ} ^{ふたり} ^{あた} ^{ざしき} ^{あが} ^{えんりよ} ^{おしえ} ^{はなし} ^き ^だンタツを一本づつ取出して二人に与え、^{ほう} ^{かく} ^{うちあ}座敷に上って遠慮なく、教の話^{おしえ} ^{はなし} ^き ^だを切り出した。すると二人も自分たちは^{ふたり} ^{じぶん} ^{ほう} ^{かく} ^{うちあ}キリシタンを奉じていると隠さずに打明けた。

^{いまむら} ^{ひと} ^{うらかみ} ^{よにん} ^{いちせんや} ^{とま} ^き ^{こうきしん}今村の人たちは、浦上の四人が、おシマの^{いっせんや}一銭屋に泊ったと聞いて、^{こうきしん}好奇心にもえて^{おおぜいあつま} ^き ^{せま} ^{いえ} ^{たちま} ^{ひとやま} ^{うま} ^{いま} ^{ふかほり} ^{とく}大勢集って来た。おシマの狭い家は^{おしえ} ^{せつめい} ^{はじ}忽ち人山に埋った。今こそと^{さぶろう} ^{ろうじん} ^{おしえ} ^{せつめい} ^{はじ}徳三郎たちは、老人たちに、キリシタンの教を説明し始めた。

^{ろうじん} ^{なに} ^{ようす} ^{おしえ}しかし老人たちは、あくまで何もわからない様子をする。「^{おしえ} ^き ^{きょう}どうした教で、どこから来たものかな」と尋ねるので、^き ^{たず} ^{せんきょうし} ^{つた} ^{きょう}フランスの宣教師が伝えたキリスト教である、と^{みおしえ} ^{たいよう} ^{せつめい} ^{へん} ^{おい} ^{きょうぶん}御教の大要を説明したが、「^{たず} ^{とくさぶろう} ^{てん} ^ま ^{てんししゆくし} ^し ^{としんきょう}変な教えでござるな、お経文はありますか」と尋ねる。それで^{とくさぶろう} ^{てん} ^ま ^{てんししゆくし} ^し ^{としんきょう}徳三郎は、「天に存す」「ガラサ(天使祝詞)」「ケレド(使徒信経)」

などの祈りを誦^{いの}て見^とせたが、「妙^みなお経^{みよう}文^{きようぶん}もあればあるものよ。」と、全然^{ぜんぜん}わからない様子^{ようす}をして見^みせる。

聖^{せい}絵^えや、聖^{せい}像^{ぞう}や、公^{こう}教^{きよう} 図^ず解^{かい}などを見^みせても、「わからぬ、わからぬ」と答^{こた}えるばかりでどうしても、自分^{じぶん}達の信^{しん}仰^{こう}をあらわさない。コンタツを取り出^とした徳^{とく}三^さ郎^{ろう}が、前^{まえ}もって手^てを洗^{あら}わずにそれ^ふに触^ぶれると、仏^{ぶつ}教^{きよう}的^{てき}見^{けん}地^ちから、「手^てを洗^{あら}わずに珠^{じゆ}数^ずに触^{さわ}って罰^{ばち}があたりませんか」と気^きもちを悪^{わる}くして見^みせた。

徳^{とく}三^さ郎^{ろう}は「ロザリオの珠^{たま}には魂^{たましい}は宿^{やど}っていない。手^てを洗^{あら}わず触^{さわ}っても決^{けつ}して罰^{ばち}はあたらぬ。さあ皆^{みな}さんも触^{さわ}ってごらんさい」と差^さし出^だしても「いや触^{さわ}ると罰^{ばち}が当^{あた}ります」と言^いって老^{ろう}人^{じん}たちは引^ひ揚^{きあ}げて行^いった。

今^{いま}村^{むら}の信^{しん}者^{じゃ}たちが、すぐ^{じじつ}に事^う実^あを打^あち明^あけなかつたのは、四^よ人^{にん}を隠^{おん}密^{みつ}と思^{おも}ったからである。然^{しか}し、あとな^{とく}にな^{さぶろう}っても、徳^い三^い郎^いたちは、そう云^いわなかつた。

丁^{ちやう}度^ど慶^{けい}応^{おう}二^に年^{ねん}、幕^{ばく}府^ふは第^{だい}二^に回^{かい}の長^{ちやう}州^{しゅう} 征^{せい}討^{たう}軍^{ぐん}を起^おこして失^{しつ}敗^{ぱい}し、小^お倉^{ぐら}藩^{はん}兵^{へい}の如^{ごと}きは長^{ちやう}州^{しゅう} 勢^{せい}に散^{さん}々^{ざん}打^うちのめ^うされて、藩^{はん}内^{ない}におられず、九^{きゅう}州^{しゅう} 各^{かく}地^ちに落^おちのびて恐^{きやう}怖^ふをまいていた時^{とき}であつた。浦^{うら}上^{かみ}の四^よ人^{にん}が脇^{わき}差^{ざし}をさして侍^{さむらい}の姿^{すがた}をしていたため、小^こ倉^{くら}の浪^{ろう}人^{にん}だと思^{おも}つたからだ、と巧^{うま}くお茶^{ちゃ}を濁^{にご}したのである。おシマたち二人^{ふたり}は軽^{かる}々^{がる}しく口^{くち}走^{はし}つたと云^ううので、老^{ろう}人^{じん}達^{たち}から散^{さん}々^{ざん}叱^{しか}られた。「こんな大^{だい}事^じなことを、知^しらぬ旅^{たび}人^{ひと}に打^うち明^あけるということがあるか。女^{おんな}二人^{ふたり}で今^{いま}村^{むら}を焦^{しょう}土^どにする積^{つも}りか。あれを何^{なん}と思^{おも}っているか。長^{なが}崎^{さき}から来^きたなんて真^ま赤^かなうそだ。実^{じつ}は隠^{おん}密^{みつ}だぞ」と眼^め玉^{たま}の飛^と出^でるほ^とどきめつ^{つけ}られたのであつた。

翌^{よく}朝^{あさ}、四^よ人^{にん}は新^{しん}屋^{やし}敷^{しき}に行^いつて見^みると、村^{むら}の有^{ゆう}志^しがずらり並^{なら}んでいる。一^{いち}夜^や静^{しず}かに考^{かん}えて疑^ぎ念^{ねん}も晴^はれたもの^みと見^みえ、昨^{さく}夜^やとはずいぶ^{よう}ん様^{さむ}子が変^{かわ}っている。村^{むら}の人^{ひと}たちは、「昨^{さく}夜^やはあのように申^{もう}しましたけれども、実^{じつ}は我^{われ}々^{われ}もキリシタン宗^{しゅう}門^{もん}です。然^{しか}し長^{なが}崎^{さき}近^{きん}在^{ざい}に同^{どう}宗^{しゅう}門^{もん}の^{ひと}が潜^{ひそ}んでいるといふことは初^{はつ}耳^{みみ}でしたし、多少^{たしょう}躊^{ちゅう}躇^{ちよ}するところ^{ただ}があつて、直^ちちに打^{うち}明^あけなかつたのです」と話^{はな}し出^だした。小^こ店^{みせ}の主^{しゅ}人^{じん}も来^きた。自^じ分^{ぶん}が四^よ人^{にん}を泊^とめなかつたのも、小^こ倉^{くら}藩^{はん}の浪^{ろう}人^{にん}と思^{おも}つたからで、旅^{たび}人^{じん}調^{てう}が来^くるなんて、それ^{こう}は口^{くち}実^{じつ}に過^すぎなかつた。尤^もも若^{わか}い娘^{むすめ}たちも、ずいぶ

ん入って来たのに、四人の眼が少しもそれに移らなかったので、只人ではあるまいとは思ったが、見極めがつかなかったので断ったと打明け話をした。そこで徳三郎は、浦上の出来事、ローマから宣教師が派遣されて長崎に来て、浦上にも忍び入ったこと、浦上の信徒が熱心に聖教を学び、秘蹟をうけていることなどを告げて村人たちを驚かした。

四人の色々な話が事実であるか否かを見届けるため、今村から平田弥吉と信右衛門の二人を長崎へ遣わすことになった。然し信右衛門はすぐに出発できない事情があったので、徳三郎は原田作太郎一人を残して、平田弥吉は浦上の三人と四人連れで、長崎に帰り、事の次第を天主堂に行って報告した。一日おくれて原田作太郎は、平田信右衛門と浦上へ帰ったので、徳三郎は、今村のめづらしい二人の客を、中野の実家にやすませた。浦上の信徒は、これまで全く知らなかった遠方のクリスチানের代表者というので、二人を手厚くもてなした。後から来た信右衛門は、年の頃五十才ばかりの独身者で、婦人の煮た物一切、口にせず、祈りを毎日の仕事にしているという熱心家であった。

新しいクリスチানের集団を発見して、長崎では大喜びであった。神父たちは、平田弥吉と信右衛門とから今村のクリスチアンについて、興味深い詳しい事情を聞いた。当時今村にはクリスチアン約百戸ばかり、付近にも百戸ばかり、合計二百戸のクリスチアンが、潜んでいた。三位一体のデウスを信じ、イエズス・キリストを信じ、定まった日には一緒に集って、ラテン語の「天に存す」「ガラサ」「キリエ・レゾ」「痛悔の祈り」などを調える。聖母マリアが地上に六十三年間生活し給うた事を尊ぶ為に、ガラサを六十三回となえる習慣もある。一生涯不犯を守り、一身を祈りに委ねる婦人もいた。また浦上のクリスチアンと同様に、水方、聞き役、帳方という教会の役職があったことなど、又前述したジョアン又右衛門の殉教などに関する一切の言い伝えなど、今村クリスチানের状況を、詳しくプティジャン司教(慶応二年十月司教叙階)に報告したのであった。

徳三郎は今村から来た二人のクリスチアンを手厚く待遇し、長崎の教会などを見せた。然し信右衛門は、浦上のクリスチアンが大勢集って、盛んに教を学んでい

るのに^{おどろ}驚いて、こうしていたら大事^{だいじ}が起^{おこ}るに相違^{そうい}ないと恐^{おそ}れて、二日^{ふつか}の後^{あと}には
 今村^{いまむら}に帰^{かえ}って行^いった。弥吉^{やきち}だけは尚^な暫^{おし}く止^{とど}まって教^{きょうり}理^りを研^{けん}究^{きゅう}し、洗^{せん}礼^{れい}を授^{さず}かつ
 て今村^{いまむら}に帰^{かえ}った。



今村探検については、浦川和三郎「切支丹復活」前篇 396～406 頁、浦川和三郎「浦上切支丹史」110～117 頁参照。

* 4名のその後

・深堀徳三郎

中野郷 乙名 深堀久五郎の子、久五郎は資金を集め居宅前に秘密教会聖フランシスコ・ザビエル堂を建立。

徳三郎は 10 人の神学生とペナン神学校へ留学し、マラリヤに罹り死亡。遺骨が日本へ持ち帰られたかどうかわからない。

墓地：浦上地区には見つからず。

・相川忠右衛門

里郷字土井。旅から帰ってポアリエ(浦上初代の主任司祭)神父と相談して、土井に仮聖堂を建立した。

墓地：経ヶ峰(杉本ゆり/潜伏キリシタン墓碑付近)。

注. 原塚神父(教区引退司祭)は、忠右衛門の子孫(孫?)と聞いている。

・深堀茂一

道上の茂一は、道上の茂市の誤りではないか。

茂市は里郷字道上の茂十郎の子。福山に流されたが、牢を脱出して各地流配者を励ましてまわった。

墓地：経ヶ峰と推定される。

注 1 坂本の深堀泉氏の先組と推定される。

2.1997年(平成9年)の墓石調査当時墓碑名確認できなかった。

・原田作太郎

上原は、現在の上野 1 付近。調査するも原田作太郎の情報なし。